

2020年12月27日 司祭 越山 哲也

八戸聖ルカ教会

## 降誕後第1主日 説教

「栄光とは神様がお喜びになること」

〔旧約聖書〕 イザヤ 61:10~62:3

〔使徒書〕 ガラテヤの信徒への手紙 3:23~25、4:4~7

〔福音書〕 ヨハネによる福音書 1:1~18

主の平和が皆さんと共にありますように。

2020年最後の主日を迎えました。教会暦は降誕節です。12月25日から1月6日までの2週間は降誕節です。今年もクリスマスおめでとうと互いに挨拶を交わしました。クリスマスのカードを頂きました。何人かの方は「メリークリスマス&ハッピーニューイヤー」のカードを頂きました。クリスマスの季節はちょうど年末年始と重なるのでこういうグリーティングカードのスタイルもいいなと思いました。

さて、降誕後第1主日の福音書はヨハネによる福音書第1章1節~18節が選ばれています。降誕日の福音書と同じ箇所です。(降誕日はルカ2:1~20も選択しても良いことになっていて、聖ルカ教会の降誕日礼拝はルカの方を用いました。)

今日はその中で次の箇所を心に留めたいと思います。

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」(ヨハネ1:14)

言は神さまです。神さまが肉体をとって私たちのもとに来られたのです。それがイエス様の誕生です。イエス様の誕生は「父の独り子としての栄光であって恵みと真理とに満ちていた」とあります。

先週23日に聖書に親しむ会があり、「栄光」について取り上げました。栄光とはギリシャ語で「ドクサ」と言い、4福音書に79回、そしてなんとヨハネには42回も出てきます。ヨハネはよほどの栄光好きなの

でしょうかとも出席された方と分かち合いました。栄光の意味は文字通り「光り輝く」という意味もあるのですが、それは稀です。多くの意味は「神様が太陽の数万倍のように輝くような心が躍る喜びが現れた状態」が栄光の意味だそうです。

そう考えてみるとクリスマスの出来事は周囲が明るくなるほどのまばゆい光輝くのではなく、やはりベツレヘムの家畜小屋で飼い葉おけに寝かされているイエス様の周囲はわずかな灯りがあっただけであったと私は想像します。それでは「わたしたちはその栄光を見た」というのは何を言わんとしているのでしょうか。栄光の意味から読み取るならばそれはイエス様の誕生を天におられる神様が心から喜ばれているということを私たちは信仰を通して知ることです。「見た」というのは実際にベツレヘムの家畜小屋のイエス様を見たわけではありませんのでそういうことを言っているではありません。

「栄光」が現れる時は「神様が心からお喜びになっている」しるしなのです。

99匹の羊と迷子の1匹の羊の物語でも、あの放蕩息子のたとえ話でも1匹の話が見つかった時、そして放蕩の限りを尽くしたお父さんのもとに帰ってきた息子を抱きしめた時に「天には大きな喜びがある」という表現が出てくるのです。つまり「栄光が現れた」のです。

人の目によれば神の栄光は時に理解できない、受け入れられないこともあると思います。クリスマスの出来事も私たちがイメージするような栄光ではないかもしれません。神様がお喜びになることは私たちの価値観と正反対のように思えてなりません。そして、私たちはその神の栄光をクリスマスの出来義を通して見たのです。そして神の栄光のために生きるようにいつも招かれているのです。